

四季成り性イチゴ系統‘Y’の育成

岸本 直樹・佐野 大樹・中原 範子*・松岡 静江**

A New Strawberry Variety ‘Y’

Naoki Kishimoto, Ooki Sano, Noriko Nakahara* and Shizue Matsuoka**

緒言

イチゴは菓子業界等からの需要が年間を通してあるが、夏から秋にかけては国内生産量が需要を満たすほどなく、輸入品に頼っている。冷涼な地域では四季成り性品種が栽培されているが、温暖地では夏の気温が高いため、これらの四季成り性品種を栽培しても1果重が小さくて、収量も低く、また、市販品種は種苗費が高いものやパテント料等の生産コストがかかるものが多い。このため、岡山県内には夏秋期のイチゴ産地がほとんど形成されていない。

そこで、岡山県農業総合センター農業試験場(現岡山県農林水産総合センター農業研究所)では2006年から四季成り性があり、収益性の高いオリジナル品種の作出に取り組んできた。

その結果、岡山県北部の準高冷地で、6～11月に1a当たり200kg以上の商品果収量が得られ、月平均1果重が9g以上ある四季成り性イチゴ系統‘Y’を育成したので、その育成経過と特性の概要を報告する。

育成経過

2006年1月に農業試験場(岡山県赤磐市)において、四季成り性品種(エバーベリー、サマーベリー、栃木18号、なつあかり)を子房親、一季成り性品種(さがほのか、さちのか、とちおとめ、とよのか)を花粉親とする交配を行った。1,833個の種子を交配1か月後に採り、直ぐに播種用培土を充填した3cmポリポットに播種した。発芽した1,257個体を本葉が5枚展開した段

階で6cmポリポットに移植し、移植から3週間後に10.5cmポリポットに再度移植した。交配から再移植まで、ガラス室(加温開始温度20℃)内で管理した。

同年夏に連続して発蕾する四季成り性個体を415個体確認し、特に結実性の良好な28系統を一次選抜した。2007～2009年に同試験場北部支場(岡山県津山市)で品質と収量性を確認し、5系統を二次選抜した。2010～2012年に農業研究所高冷地研究室(岡山県真庭市)で現地適応性試験を行い、収量性等に優れる‘Y’(‘エバーベリー’×‘さちのか’)を有望と認めた。

特性の概要

1. 収量特性

2012年の現地適応性試験の結果、特に7月の収量が多く、対照品種の‘サマルベリー’とほぼ同等以上の商品果収量が得られた。6～11月の全期商品果収量は‘サマルベリー’より1割程多い251kg/aであった(表1)。

2. 果実特性

果実の外観は円錐形で、果実の溝はほとんどない。果実の色は橙赤色で光沢は中程度である。果肉色は橙赤色、果心色は赤色で、果実の空洞はほとんど見られない(図1)。「サマルベリー」の果心色は白色であることから、同品種との区別が可能である。先青果の発生がやや目立つ。

月平均1果重は6～7月が15g程度、8～11月が10g程度であった(表2)。6月を除いて‘サマルベリー’よりも大きかった。果実が最も小さい9月でも平均1果重は9.6gであり、Mサイズ(9～13g:全農おかやま出荷規格)

2013年11月18日受理

*現岡山県備中県民局農林水産事業部井笠農業普及指導センター

**現岡山県美作県民局農林水産事業部勝英農業普及指導センター

の大きさがあった。

また、果実品質に関しては、‘サマールビー’よりも果実硬度はやや硬く、糖度及び酸度はやや低かった(表3)。



図1 ‘Y’の果実外観及び断面図

適地並びに栽培上の留意点

‘Y’を用いた収益性の高い栽培には標高400m以上の準高冷地が適しており、低標高地では収量が少なくなることが予測される。しかし、準高冷地においても最高気温が30℃を超える日が多い年には収量が少なくなることが予測される。そのため、‘Y’の収量の年次間差に関するデータを蓄積し、高収益栽培が安定して行える地域を明らかにする必要がある。

栽培方法は岡山農研式高設栽培システム(岡ら、1997)での養液土耕栽培を基本とした雨除けハウスの夏秋どり栽培とし、定植は4月下旬、着果開始は6月初め、収穫開始は6月下旬とする。給液濃度は、定植直後は水のみ、5月前半はEC(電気伝導度)0.5dS/m、5月後半は0.6dS/m、収穫期間中は0.7dS/mとする。換

表1 ‘Y’の月別商品果収量²(2012年)

品種・系統	商品果収量 ¹ (kg/a)						合計
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
Y	7	108	61	44	21	11	251
サマールビー	7	84	75	44	8	3	221

²5株/60cmプランター、666株/aとして算出

¹4g以上で、障害がないか軽微な果実の収量

表2 ‘Y’の月別商品果1果重(2012年)

品種・系統	商品果1果重 ² (g)						通期(6~11月)
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
Y	16.8	15	10	9.6	11.1	10.1	11.8
サマールビー	18.7	11.8	8	6.1	7.5	9.3	8.7

²4g以上で、障害がないか軽微な果実の重量の平均値

表3 ‘Y’の月別果実特性(2010年)

品種・系統	調査月	硬度 ²	糖度 ²	酸度 ²	糖酸比
		(gf/3mmΦ)	(Brix %)	(クエン酸換算 %)	
Y	7月	100	6.9	0.9	7.6
	8月	115	6.1	1.1	5.4
	9月	160	8.4	1.1	7.7
サマールビー	7月	118	7.8	1.2	6.5
	8月	104	7.6	1.1	6.7
	9月	122	9.1	1.3	7.2

²4g以上で、障害がないか軽微な果実で7~8分着色したものの5個の平均値

気開始温度は20℃とし、7～9月の高温期は遮光率50%の寒冷紗をハウスの外に張り遮光する。

摘 要

岡山県農林水産総合センター農業研究所で育成したイチゴ‘Y’は、6～11月の商品果収量が250kg/a程度、月平均1果重が9g以上の多収で大粒の四季成り性系統である。

引用文献

岡修一・川合貴雄（1997）土壌を基本とした軽量培地によるイチゴ高設栽培方法の開発（第1報）．園学中四国支部要旨，36:35.